

朝鮮におけるミッション高等教育史の展開

李 省 展

はじめに

私は東京生まれで在日コリアン二世ですので日本語で講演したいと思います。最初に同志社大学人文科学研究所で学際的な広い視野をもつカンファレンスを組んでいただき、お招きくださったことに感謝します。陶先生が研究史の来歴、中国における状況を紹介してくださいましたので、私は明日のシンポジウムにつなげることに強調点をおきたいと思います。越境する教育事業という観点、植民地主義、帝国の問題とあわせて平壤の崇実大学の発展を中心にさまざまな他の地域の高高等教育の発展、問題点を紹介できればと思います。

まず、韓国における研究の代表的なものを紹介させていただきます。初期には、韓国の国民化、近代化の流れの中でのミッションの教育はどうであったのか、あるいは日本の植民地主義との関係で抵抗運動、独立運動と、どう関係していったのか、といった観点からの研究が比較的多かったと思います。神奈川大学の尹健次さんが大部の『朝鮮近代教育の思想と行動』（東京大学出版会、1982年）という本を出されましたが、この本が出た時、韓国での研究はまだ進んでいませんでした。数年前、韓国教育史学会に招かれて光州の教育大学で話したことがありますが、尹健次先生のこの本を一生懸命勉強したと教育史研究者が言っていました。

長年あたためてきた研究を一挙にこういう形で本にされた在日二世・尹健次先生の労作ですが、その中で、ミッションによる教育について、次のようにコメン

ト・評価しています——20世紀初頭の朝鮮において、キリスト教教育（初等・中等・高等教育）は量的に拡大し、総督府の日本人官僚でさえもそれを十分に認めていた。ただ、それは、朝鮮人子弟における親米的事大主義と侵略者に対する無抵抗主義の役割を果たした——と。親米的事大主義という評価には、かなりあたっている部分もあると思っています。私は学部・大学院と、国際基督教大学で勉強したのですが、日本の戦後の政策の中で、ある意味で親米的なスタンスがあったのではないかと感じています。朝鮮でも同じように朝鮮のキリスト教教育・ミッション・高等教育が、親米的なスタンスを生み出す余地があるということに関しては、私も同意することがあります。しかし、「侵略者に対する無抵抗主義を注入する役割を果たした」という評価には問題があります。各学校史を見ていくと、日本の植民地主義に対する抵抗運動がミッションスクールでも活発に行われていることを確認できます。

比較的バランスのとれた日本の研究者による朝鮮高等教育研究として、馬越徹さんの『韓国近代大学の成立と展開』（名古屋大学出版会、1995年）があります。そこでは、総督府が大学教育を認めないという政治状況の中で、一般的な学問や専門的な学問（特に医学指向）を行う大学をミッションがつくり上げてきたことが肯定的に評価されています。医学という部分も、割と重要なところですが、中国も朝鮮も医学教育にかなり積極的に取り組んできたのですが、日本における医学教育は、規制によって、ミッションによるそれが発展をみなかったという状況があります。朝鮮では、総督府の規制に対して、財団法人を設立し財政的基盤が確立されました。考えてみれば当然ですが、経済格差がありますから、アメリカの多少のお金でも、朝鮮に持ってくれば多額の有効な資金となります。そこで馬越さんは、ミッションとアメリカ人篤志家が、常に抵抗の姿勢を堅持しながら、そして総督府と一定の妥協もしながらも、学校を存続させたこと、さらに朝鮮人生徒に高等教育の機会を与えたことを評価しています。さらに儒教的な倫理が濃厚な状況の下で（中国、朝鮮、日本は等しく同じような要素があると思いますが）、

とりわけ女子高等教育を通じて女性の社会的リーダーを養成したことが評価されています。

ごく最近に韓国で出された呉成哲さん編の『植民地教育研究の多変化』（2011年、ソウル、教育科学社）所収論文を読んでいますと、8編中、4つの論文がキリスト教教育と深く関係していることが分かりました。明日のコメンテーター・報告者でもある駒込武さんも執筆者の一人で、神社参拝について論じておられます。この本の半分がキリスト教教育に関係するものでありますが、この点、日本の教育史と比べてかなり違っています。裏を返せば、それだけ朝鮮の近代教育においてキリスト教が果たした役割が大きいとも考えられるわけです。

それには原因があります。今日の議論もそのあたりを手がかりにしますが、端的に言えば、朝鮮王朝、大韓帝国政府が近代教育に取り組むことに遅れてしまったことです。ミッションが中心となって、朝鮮における近代教育のネットワークをそれよりも先に形成しました。1910年の段階で、私立学校が2250、公立学校が59という統計がありますが、それだけ私学優位の学校体制があったのです。これは朝鮮だけの状況ではなく、結果として、アメリカ、オランダの教育事情と似かよっています。オランダでは現在、初等教育の7割を私立学校が担っています。オランダでは、信教の自由を守り、プライベートなものを大切にしていこうという中で、私立学校優位という教育体制が構築されていきました。アメリカもそうですが、昔、州立大学の多くは農業学校でした。エリート校をみていきますと、ハーバード、プリンストン、イエール、ブラウンなど、すべてミッション・教会と関係があるキリスト教系の大学です。そういう部分にも関心を払うことと、もう一つの大きな出来事として、19世紀から20世紀初頭の東アジア情勢の中で、朝鮮におけるミッションによる高等教育の研究がなされていかなければ、実態を解明することはできないという立場に私は立ちます。

I 帝国主義とミッションと宣教師

その当時、特に朝鮮の場合は、長老派とメソジスト派が大きな役割を果たしました。特に長老派の宣教本部には2人の東アジア宣教に深く関係したセクレタリーがいました。Robert Speer と Arthur J. Brown です⁽¹⁾。前者は後にアメリカの北長老教会の総会長にもなるという、大きな影響力をもつ当時のキリスト教指導者でありましたが、彼は1904年に『宣教と近代史』という本を出しています。太平天国のことを一章として採り上げていますし、朝鮮における東学運動、あるいは義和団、日本の改革、明治維新などに関しても、深い関心をもっています。この本の中で19世紀、20世紀初頭の帝国主義をSpeerは「ニューインペリアルイズム」と定義しております。今までと違うインペリアルイズムだということですね。その中で、西洋の東洋に対する優位性を強調しています。「西洋の膨張は止むことがない。世界が福音化してしまったら、宣教する必要はなく、宣教運動が完全に停止されることがあるかもしれないが、西洋の東洋に対して行使される偉大な計画は継続するであろう。それは必然である」と言っています。

そして「西洋人の人生観、新帝国主義、商業の受容、移民あるいは植民地主義の潮流、抑えることのできない世界の諸勢力の交錯、その中で神の確かな意思が、西洋と東洋を今までになく接近させ、全東洋が確立したものは揺り動かされるであろう」とも述べています。つまり彼は、西洋文明とはまぎれもなくキリスト教文明であると考えているのです。西洋世界の動き、帝国主義の動きは、それ自体のためにキリスト教宣教を必要とすると言っているわけです。西洋の運動で唯一正当化できるのは道徳であるとしているのは、クリスチャンらしいところです。ごく最近の私の論考の中では、当時の帝国主義やクリスチャンについて、どういふアプローチで定義していったらいいのかと考えまして、「人道的帝国主義」という用語を使いました。帝国主義の中にも、市民社会が創り上げてきた人道的なものやヒューマンライツをも織り込んでいく動きがみられるからです。

もう1人が Arthur J. Brown⁽²⁾ です。特に長老派の海外政策に対して決定的な役割を果たしましたが、彼は日本最員で、日本の帝国主義を擁護します。日本は西洋に遅れながらも新しい改革をしているとし、兄が弟をみるようなまなざしで日本を育てていこうとします。彼は日露戦争の時も日本を擁護する立場にあります。以上のように、帝国主義という大きな文脈で、宣教・高等教育・ミッションのことも考えていかないといけないということだと思っています。

II 朝鮮におけるミッションとミッションスクールの展開

高等教育を語る時に、教会を切り離すことはできません。また、初等中等教育とも切り離すことはできません。さらに医療宣教とも重なります。H.G.Appenzeller と H.G.Underwood が1885年に朝鮮にやってくるとすぐに、ミッションスクールが誕生していきます。培材学堂、Underwood 学堂といったミッションスクールがソウルに出現します。そこには三位一体的な宣教論があり、教会が中心となりつつも学校、病院が一体となり、有機的な形で宣教していくという近代の宣教論があります。教会と学校と病院が一体となった状況を、朝鮮、中国ではビジュアル化できるのですが、これは残念ながら、日本ではなかなか確認できないものです。

朝鮮の慶尚北道の大邱に行きますと、小高い丘の上に宣教師館があります（写真1）。H. E. Blair と H. H. Henderson が住んだところであり、そのすぐ下の方、丘の麓に、大邱の長老派第一教会（写真2）があります。さらにすぐそばに東山病院があつて、啓明大学校東山医療院（写真3）と書かれています。それから少し離れたところに信明女学校があります。韓国でも女子校生の独立運動があつたという点で有名になっているところで、レリーフがあります（写真4）。また歴史資料館があり、当時の初期宣教の地図が展示されています。さらに少し離れたところに男子校の啓聖学校があります。2キロと離れないところに教会があり、



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

写真 1～4 大邱の「三位一体」的宣教状況

学校があり、病院がある、という形で宣教が展開されています。韓国の全羅南道の全州や順天というところもそうです。

中国では、先ほど陶先生が紹介された山東省の済南に行きますと、山東大学があります。陶先生は若い時に病気になって、バプテストの病院で治療を受けたとおっしゃいましたが、病院があって、教会があって、さらに、昔は Cheloo University (齊魯大学) と呼ばれていた山東大学があるということが、確認できます。三位一体的な宣教です。山東省を下って濰坊市にいくと楽道院があります。日本では知られていませんが、日本人が第二次世界大戦の時、アメリカにおいて強制収容されたことのカウンター措置として、華北の西洋人をこの楽道院に強制収容したことは、中国及び西欧世界では有名です。なぜヨーロッパでも有名かといいますと、1924年のパリ・オリンピックで陸上競技400メートルの金メダルを取った有名な英国のアスリート、Eric Liddell がここに収容されていたことによります。燕京大学の外国人教員もここに収容されていました。かつて Calvin

Mateer が宣教したところに近い煙台にも外国人学校があり、中等教育が行われていて、その学生たちもここに収容されました。そこに行ってみて驚いたのは、まず数です。2000 人ものが楽道院に収容されました。Calvin Mateer の息子が建てた学校は、現在公立中学校になっていて、宣教師の建物も残っていますが、そのすぐ近くに中国政府が認めた教会があります。そして、少し離れたところに人民病院があり、ここにも三位一体的な構造がみられます。

次に紹介したいのは平壤のケースです。平壤は、「東洋のエルサレム」といわれており、朝鮮で最もキリスト教が栄えたところです。図1を詳しく見ていきますと、上の方に女性への教育のことが書いてあります。インダストリアル・スクールには100名の女性がいると書いてあります。また有名な外国人学校もあり、中国からの学生もいました。そしてボーイズ・アカデミーには570人の学生がおり、ユニオン・クリスチャン・メンズ・カレッジには150名の学生がいました。ユニオンホスピタルには13,000人の患者がいて治療が行われていました。宣教師はどこに住んでいるかといいますと、神社参拝問題の時に獄死して殉教した朱基徹牧師を支えた宣教師の C. F. Bernheisel が、21番の住宅に住んでいました。

こういうことをみていきますと、朝鮮におけるキリスト教宣教という点において、三位一体構造が有効に働いたのではないかと考えられます。日本在住の J. B. Hail は長老派の宣教師で、先ほど拝見した人文研の図書室にも、紀州伝道に関わる彼の書物がありました。

ONE SIXTH OF A SQUARE MILE OF MISSIONARY ACTIVITY (120 ACRES)
WOMEN'S HIGHER BIBLE SCHOOL, 50 STUDENTS
WOMEN'S STATION BIBLE INSTITUTE, 160 STUDENTS
WOMEN'S INDUSTRIAL SCHOOL, 100 STUDENTS



- (a) Primary and High School for Missionary Children of all Korea 100 Students
- (b) Boys' Academy 570 Students
- (c) Industrial Shop
- (d) Union Christian Men's College 150 Students
- (e) Men's Bible Institute 160 Students
- (f) Girls' Academy 200 Students
- (g) Presbyterian Theological Seminary of all Korea 130 Students
- (h) Local Church Congregation 1,500 Prayer Meeting 1,000 Sunday School 2,000
- (i) Union Hospital 13,000 patients 47,000 Treatments Four Missionary Doctors Five Korean

Pyongyang Presbyterian Compound

- | | | |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 15 City Churches 1000 Chinese 300 Country Churches in Provinces 2000 Chinese | <ul style="list-style-type: none"> 1. Residence to compound 2. Union Christian Hospital Building 3. Men's Bible Institute & Bible School 4. Men's Church 5. Denary Administration Building and Directorate 6. De Gault's House 7. De Gault's House 8. De Gault's House 9. De Gault's House 10. De Gault's House 11. De Gault's House 12. De Gault's House 13. De Gault's House 14. De Gault's House 15. De Gault's House 16. De Gault's House 17. De Gault's House 18. De Gault's House 19. De Gault's House 20. De Gault's House 21. De Gault's House 22. De Gault's House 23. De Gault's House 24. De Gault's House 25. De Gault's House 26. De Gault's House 27. De Gault's House 28. De Gault's House 29. De Gault's House 30. De Gault's House 31. De Gault's House 32. De Gault's House 33. De Gault's House 34. De Gault's House 35. De Gault's House 36. De Gault's House 37. De Gault's House 38. De Gault's House 39. De Gault's House 40. De Gault's House 41. De Gault's House 42. De Gault's House 43. De Gault's House 44. De Gault's House 45. De Gault's House 46. De Gault's House 47. De Gault's House 48. De Gault's House 49. De Gault's House 50. De Gault's House 51. De Gault's House 52. De Gault's House 53. De Gault's House 54. De Gault's House 55. De Gault's House 56. De Gault's House 57. De Gault's House 58. De Gault's House 59. De Gault's House 60. De Gault's House 61. De Gault's House 62. De Gault's House 63. De Gault's House 64. De Gault's House 65. De Gault's House 66. De Gault's House 67. De Gault's House 68. De Gault's House 69. De Gault's House 70. De Gault's House 71. De Gault's House 72. De Gault's House 73. De Gault's House 74. De Gault's House 75. De Gault's House 76. De Gault's House 77. De Gault's House 78. De Gault's House 79. De Gault's House 80. De Gault's House 81. De Gault's House 82. De Gault's House 83. De Gault's House 84. De Gault's House 85. De Gault's House 86. De Gault's House 87. De Gault's House 88. De Gault's House 89. De Gault's House 90. De Gault's House 91. De Gault's House 92. De Gault's House 93. De Gault's House 94. De Gault's House 95. De Gault's House 96. De Gault's House 97. De Gault's House 98. De Gault's House 99. De Gault's House 100. De Gault's House | <ul style="list-style-type: none"> 600 Teacher 10000 People 40000 People 100 Primary 10000 People |
|---|--|--|

図1 平壤長老派コンパウンド

彼もその小高い丘に登り平壤の光景を見て、びっくりするわけです。「まるでアメリカの東海岸のような風景である」と驚嘆の声を上げています。さらに George Fulton という宣教師は、平壤の光景を「帝国の中の帝国である」と評します。

図2は、1930年代の平壤周辺を記したマップです。朝鮮の西北地方に教会がこれだけあるという地図なのですが、平壤南北道に十字架が多数見え、キリスト教発展を如実に著しているものだといえます。

朝鮮の教会を基盤とした活動の中で、クリスチャンが育ってきます。そうすると、学校をつくらねばならないということになり、教会立の学校が建てられます。そこで朝鮮人クリスチャンが教える初等学校ができ、宣教師が教える中等教育へと発展する、という展開の中で、高等教育が花開いていきます。

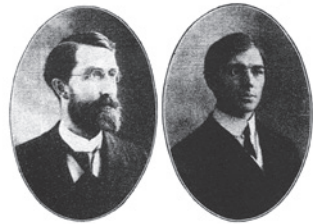
こうした活動を担ったのが William Baird という人物です。この人は McCormick Theological Seminary (神学校) に学び、Robert Speer が深く関係した Student Volunteer Movement により、東洋で宣教したいと考え、朝鮮にアポイントメントを求めました。彼は Del Norte 大学でも学長を経験していましたが、そこにはメキシコ人もかなりいたということです。彼は教育に関してはうってつけの人材であるということで朝鮮にやってきて、最初は釜山、そしてソウルの Underwood 学堂 (後に Miller 学堂・徽新学校) で教師を務めます。もったきちとしたキリスト教教育ができないかという不満をもっていた彼は、ソウルの学校を批判して平壤に活路を見出します。この Baird が中心となって教育政策を樹立していくのですが、初等教育は朝鮮人教師による教会立の学校が行い、中等



図2 朝鮮西北部の地図

教育に関しては宣教師と朝鮮女子による教育が実施されます。

一方、高等教育は宣教師中心に行われました。1897年に崇実学堂が設立され、女子の学校・崇義学堂は1903年にできます。Bairdの文章を読んでいくと、「Calvin Mateerが述べていることはすばらしい。彼による土着主義的な教育、バナキュラー・エデュケーション、現地語を用いた教育が大切だ」「ミッションの教育の中で重要なのは、朝鮮人のクリスチャンの指導者を養成すること。けれども、あまり現地の文化から離れてしまうのはよくない」と言っているのがわかります。彼は中国山東省のCalvin Mateerの教育論に影響を受けており、崇実学堂は、Calvin Mateerと同じように英語教育に消極的で（後には変わってきますが）、アメリカで使われている英語の教科書を朝鮮語に翻訳して教材に用いたりしていました。1910年代終わりにソウルの延禧専門学校のO. R. Avisonという宣教師が、崇実学堂出身の学生に関して、「崇実の学生は英語が全然できない」と不平のコメントを發しているのは興味深い点です。



Ⅲ ミッション高等教育の誕生

大学に関しては、1904年に崇実大学が設置され、連合崇実大学となっていきます。長老派のWilliam Bairdと、A. L. Beckerというメソジストの宣教師とがユニオンを組んで財政的な基盤を整えていこうと動き（図3・写真5）、宗派大学、すなわち教会と深い関

図3・写真5
連合崇実大学学校案内



写真6 Park College 全景

係をもったりベラルアーツ中心の大学として、平壤に誕生します⁽³⁾。崇実大学は大韓帝国により認可されフィラデルフィアの長老派第一教会が財政的に支えました。

Baird の後に学長になる G.S. McCune が、崇実大学をどういう大学にしたいかということに関する文章を残しており、その中で「アメリカの Park College をモデル校としたい」と述べています。Park College (写真6) はユニークなカレッジで、東部から西部へと広がる開拓にあたって、有為のクリスチャン人材を育成するという目的をもつ長老派の学校です。ペンシルバニアからたくさんの学生がこの大学に入っています。その当時の Park College は “Poor Man’s College”、貧乏な人の学校といわれ、働きながら学ぶことができました。教育内容は長老派のもので、カルヴィニズムの影響を受けていました。礼拝もきちんとし、聖書の勉強もし、日曜日の教会出席が奨励されるという大学です。一方、勤勉・勤労に重きをおいており、実際に学生が働いて稼いだお金をプールして学校のために使い、学生たちはその稼ぎで生活していくというシステムが、朝鮮に持ち込まれていきます。朝鮮は貧しく、8～9割が農民の社会です。働きながら学ぶことができる学校として二部制が採用され、Working Department では、午前中働いて午後から勉強します。最初は西北部中心に学生がやってきましたが、次第に西北部以外からも少しずつ学生が集まってくるという形で発展していきます。

女子の高等教育はどうだったでしょうか。正規ではなかったのですが、崇義という女子校を出た向学心の高い学生たちが崇実大学で学ぶこともあったようです。ソウルにおいては、Mary Scranton が成立した梨花という学校がありましたが、1910年に大学科を設置し、本格的に女子の高等教育部門ができていきます。Lulu Frey という人が、女子のエンパワーメントで手っとり早いのは高等教育を施すことだと主張し、反対があったにもかかわらず、大学科が設置されていきます。海外の女性宣教部、アメリカのシンシナティ、フィラデルフィア、ニューヨーク、ノースウェスタンの宣教会が財政的に支援し、女子の高等教育機関が徐々に整備されていきます。現在の梨花に行きますと、多くの校舎に宣教師の名前、篤

志家の名前がつけられています。

IV 植民地主義とミッション高等教育

以上のように高等教育は発展しますが、1910年代からは日本の植民地主義との葛藤関係（影響は1905年から出てきていましたが）に入っていきます。当時のWilliam Bairdの文献を読みますと、彼がエヴァンジェリカルな人物で、福音に固く立つという教育者だったということがわかります。彼は世俗的な大学教育に対して危機感を感じており、教会との関係を重視する大学観をもっていたから、世俗化の荒波の中、1916年に学長を辞任してしまいます。

大学をどうするか、日本の植民地主義にどう対抗していくかという点から、宣教師によって朝鮮のミッション教育再編が行われます。再編後のトップに位置付ける大学の所在地をどこにするか——平壤にするか、ソウルにするかという議論が展開していきます。結局、ミッションで多数決をとるのですが、ソウルが勝って1917年に延禧専門学校が、さらには私立セブランス連合医科専門学校が建てられていく。1921年、延禧専門学校には神学科、文学科、数学及び物理学科、4年制の学科ができます。商科、農学科、応用科学科は3年制です。崇実大学の福音主義的な教育と比べると、ソウルにできた大学は専門学校ですが、よりユニバーシティに近い形態であったことがわかります。

植民地権力とミッションスクールはどのような関係性にあったのでしょうか。植民地教育の展開上、キリスト教や私学の学校はさまざまな形で規制されていきます。植民地権力は、規制することによってキリスト教の勢力を削ぎ、具体的な事件を捏造することによってこれを弾圧していきました。その一つが、寺内正毅総督暗殺未遂事件とも呼ばれている105人事件⁽⁴⁾です。信聖学校の学生や教師が関わり、さらに宣教師もかかわったとされました。国友尚謙という人が強引にフレームアップしたため、裁判の過程でいろんな矛盾が出てきます。宣教師が暗殺事件

に関与し、短銃を所持して戦闘したという嫌疑をかけられたことから、この事件は、朝鮮と日本の関係としてだけではなく、世界的な関心事となっていくのですが、このような事件を起こしてキリスト教勢力を弱めていこうという動きがありました。

さらに1915年、「改正私立学校規則」が制定されます。これは何を指したものであったのでしょうか。文部省訓令第12号が出された1899年は、日本の近代史において重要な年であり、「第二の開国」とも言われます。それまで外国人は居留地に閉じ込められていましたが、内地で外国人と日本人が共生していくことになります。その時、日本が一番恐れたのはキリスト教の影響だったわけです。文部省訓令第12号というのはミッションスクールにおいてキリスト教を教えるはいけない。キリスト教の礼拝をしてはいけないというものでした。これは1915年には、日本ではすでに片づいている問題、実質上、解決をみている問題なのです。日本の青山学院、明治学院などはその時に抵抗した学校ですね。学院とは「正規の学校ではない」という意味です。徴兵制の猶予の問題などもありましたが、政治的な折衝でほぼ解決していました。

それにもかかわらず1915年の段階で、同様の政策を朝鮮において再適用しました。ミッションスクールを規制してその勢力を弱め、植民地教育体制に編入していく、吸収していく動きと考えていいと思います。長老派の宣教師はこのことに対して怒ります。朝鮮のキリスト教会全体でいろいろな議論がなされるのですが、ある日突然、メソジスト派が裏切ります。メソジストの学校は総督府の認可を受け高等普通学校になっています。弾圧の中で、日本の植民地教育体制の中に組み込まれることになる選択をしたということです。ただ長老派は、ある意味、厳しく闘います。閉校も辞さないという言葉も出てきます。1930年代になると神社参拝問題でミッションスクールは苦勞することになりますが、実にその芽は1915年にあり、この時に閉校しかけたことがあったのです。閉校も辞さないとしている時に、1919年の3・1独立運動が起こります。3・1独立運動が起こ

ると総督府は政策を後退せざるをえず、相対的な言論の自由を認めた形で文化政治を行います。文化政治の中で斎藤実が中心になって、ミッションと協議しながら指定学校制度をつくっていきます。日本と同じような動き・流れがあるのですね。

注目すべきは、朝鮮の改正私立学校規則の下、朝鮮の宣教師たちが前面に出ることはできなかったことです。統治権力と直接対決はできないので、宣教本部のBrownが中心となって朝鮮のミッションの意見をまとめ、この事件を協議します。総督府の小松緑という官僚との間で、宗教教育をめぐる意見を書簡によって戦わせました。日本型の近代教育とアメリカ型の近代教育の違い、それが植民地朝鮮において如実に出てくるわけですね。ただ朝鮮の宣教師の側でも、ソウルのH. H. UnderwoodやE. W. Koonsなどは、どちらかという、総督府の植民地教育体制に協力しても構わないという方向性で議論し、井深梶之助や明治学院のWilliam Imbrieなどとも協議をするという動きがありました。

3. 1 独立運動に関しては現在、大邱において、女子学生がデモンストレーションしたことを記憶していこうというナショナリズムの動きがあることにより、信明女学校の周囲が整備されています。また、平壤のMowryという宣教師は、第5代の崇実大学学長になった人ですが、犯人隠匿罪ということで6カ月の求刑を受けています。Park College、すなわち崇実のモデルになった学校では、朝鮮人留学生が独立宣言文を出しています。研究を進めていく中で、なぜここでPark Collegeが現れてくるのかと不思議に思ったのですが、崇実がPark Collegeをモデルとし、そこに朝鮮からの留学生がいたことによるわけです。独立運動の中で声を上げた留学生たちの宣言文の内容を見ていくと、全くもってリンカーンの独立宣言と似通っています。アメリカの民主的な政体をモデル、理想像としたような声明文が出されています。

なお、留学生に関する研究も今後の課題だろうと考えています。崇実専門学校は文科系ですが、Bairdが当初目指したのはリベラルアーツ系の文理大学で、文

科といっても理科系の教育にもかなり力を入れておりました。崇実専門学校において農科が認可されるのが1931年、科長は李勲求という朝鮮人で、西洋人の教授が2名、日本へ留学した朝鮮人が3名、教師として勤めていました。しかし高等教育機関は専門学校止まりで、高度な専門教育を受けようとするアメリカや日本へ留学する必要性がありました。中国には13の大学があったと言うお話でしたが、朝鮮では2つ、女子教育を入れて3つと数が限られていたからです。

さらに付言として、キリスト教宣教という観点からいけば、山東省や「満州」の瀋陽、朝鮮人が多数住む北間島に伝道隊を送るといった学生活動がみられます。音楽、スポーツの啓発運動も行われ、社会史的な観点から掘り下げた形で、ミッション教育史の可能性もみえてくるのではないかと思います。

おわりに

植民地末期には、さらに葛藤が生じることになります。ミッションによる高等教育自体が、神社参拝が強要される中で崩壊していきます。同志社が学校を閉じるとすれば大変なことになったはずですが、それが朝鮮では実際に起こりました。宣教師は、日本によるこうした教育状況の下ではミッションの教育を行うことはできないと考え、朝鮮の学生たちに学業をどうやって継続させるか、総督府の学校に学生を送るのか、といった苦難の中で、門を閉じていくことになります。

「越境」という観点からここでおさえておきたいのは、アメリカのファンダメンタリズムとモダニズムの論争です。Robert Speer は、モダニストではなく中道的な立場ですが、J. G. Maichen というファンダメンタリストの中心となるクリスチャンと論争をします。それが朝鮮に飛び火した形になります。J. G. Holdcroft という宣教師はファンダメンタリストですが、彼がミッションの中心人物となって朝鮮のミッションスクールを閉校し、その後、アメリカに帰ってファンダメンタリスト系の独立宣教会のセクレタリーになっていきます。アメリカで

の動きと朝鮮の動きが神社参拝とリンクしていくわけですが、このあたりは駒込さんが台湾の状況に詳しく、明日の議論になるかと思います。

神戸ミッションと関係の深い Darby Fulton が朝鮮南部の南長老派の学校を視察します。南長老派は北長老よりももっと保守的な考えをもっていました。北長老派が閉校するといいながらも閉校を決定できないところで、神戸中央神学校の Samuel Fulton の息子で日本滞在が長かった Darby Fulton が声明を出し、全羅道において自主的な閉校方針を固めました。このように日本のミッションの動きと植民地朝鮮の動きが連動していることも確認できます。

植民地期末期に学校が崩壊した後はどうなったでしょうか。延禧専門学校は京城工業経営専門学校になります。セブランス医学専門学校は旭専門学校になり、梨花は京城女子専門学校になります。クリスチャニティとしての継続性はあるのかないのかという議論がありますが、日本人クリスチャンも関わっていたりしますが、総督府サイドの学校になっていってしまいます。それに対して宣教師は日米関係が悪化していくと、続々とフィリピン経由で日本から朝鮮からアメリカに帰っていきます。H. H. Underwood も帰りますが1944年の段階で日本は負けると判断し、再開にあたってのアンケートを彼が中心となって行います。朝鮮で宣教活動をした人たちに対して、朝鮮に戻る意思があるのかを尋ね、より重要な点としては、各教派に対し、高等教育を朝鮮で再開したいが、それに参加するかどうかの問いを投げかけています。

日本の敗戦により、朝鮮が解放されました。その後、崇実はどうなっていったのでしょうか。朝鮮戦争が起り、中国も加わる中で、朝鮮人はイデオロギーの選択を迫られます。南から北に行く人も、北から南に行く人たちもいました。戦争のさなかの当時について、崇実大学教授のある先生から聞いた話ですが、アメリカが原爆を北に落とすのではないかという噂が広がったので自分は南に渡ることを決意したということです。ソウルの南大門市場付近が、北からの避難民たちが中心になってコミュニティ形成をしたところでした。1954年、さまざまな苦勞

特集「ミッション高等教育史の可能性」

を経て、平壤にあった崇実大学がそこに再建されていくことになります。

以上です。ご静聴ありがとうございました。

注

- (1) J. F. Piper, Jr. *Robert E. Speer* (Geneva Press, Louisville, Kentucky, 2000) 参照。
- (2) A. J. Brown については、WCC 資料に 100 歳の折の写真が紹介されている。
<http://archives.wcc-coe.org/Query/detail.aspx?ID=69323> accessed on Nov. 19, 2013.
- (3) 崇実大学については、崇実大学校 100 年史学編纂委員会編『崇実大学校百年史』第一巻（ソウル、1997 年）を参照。
- (4) 詳しくは、〈参考文献〉欄拙稿（2013）を参照。

〈参考文献（拙著）〉

- ・『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代 ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』（単著）社会評論社、2006 年。
- ・駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』（共著）昭和堂、2007 年。
- ・趙景達編『植民地朝鮮』（共著）東京堂、2011 年。
- ・『東アジア近現代通史』別巻（共著）岩波書店、2011 年。
- ・「米国北長老派海外宣教本部の東アジア認識と 105 人事件」（『キリスト教史学』第 67 集、2013 年）

〈画像出典〉

写真 1～4 筆者撮影

写真 5 拙著『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代』49 頁より転載。同上。出典：1910 年刊 Pyeongyangn Union Christian College の英文パンフレット（1910 刊 Presbyterian Historical Society 所蔵）

写真 6 Joseph Earnest McAfee, *A Mid-West Adventure in Education* (Kansas City , Missouri ; Alumni Parkarna Committee, 1937) 附録より

図 1 拙著『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代』131 頁より転載。出典：R.H.Baird, *William M. Baird of Korea, A Profile*, Oakland, 1968.

図 2・3 写真 5 に同じ。50、49 頁。